

【資料・研究ノート】

日本におけるアフリカ研究の始まりとその展開
—国際学術研究調査関係研究者データベースを使って—

椎野若菜

(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)

Beginning and its deployment of the African Studies in Japan:

By using Database of Researchers joining Overseas Scientific Research Projects

SHIINO, Wakana

Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa

日本におけるアフリカ研究の始まりとその展開
—国際学術研究調査関係研究者データベースを使って—

椎野若菜

(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)

Beginning and its deployment of the African Studies in Japan:

-By using Database of Researchers joining Overseas Scientific Research Projects-

SHIINO, Wakana

Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa

The Overseas Scientific Research Coordination Team established the secretariat at Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies (ILCAA, TUFS) in 1983. Since then, mainly they have been working on activities for The Overseas Scientific Research, such as interdisciplinary information exchange and research exchange, which have been performed connection adjustment with Japanese Ministry of Education and Cultures and Japan Society for the Promotion of Science (JSPS).

Field Science Center (FSC) under ILCAA has constructed “database of researchers joining overseas scientific research projects” as one of their activities. In this paper, by taking advantage of the feature of this database, I would like to show the locus into which present research on Africa in Japan has been developed. In other words, I would like to make it clear how the African study in Japan began and how a researcher network expanded.

The first research team for African studies which was organized by professor Imanishi and Itani at Kyoto University was composed of the researchers in the liberal arts and science course, like paleontology, pale anthropology, grammatology, the physical anthropology, and the social anthropology and so on over many fields. Researchers who were taught how to walk in the research field and academically influenced by two of them became centers and organized as the following phase of the study. It is a footprint of the development of researcher's connection and study through African land where the fieldwork is practically done, not through a so-called doctrinal history, to pursue details of organizing Grants-in-Aid for Scientific Research (KAKENHI) like this.

0. はじめに
1. 海外学術調査総括班とは
2. 日本のアフリカ研究の流れ
3. 調査隊編成の変遷：データベースによる検索から
 3. 1 1961年から1967年の初期科研
 3. 2 1967年の伊谷隊以降
 3. 3 1973年の伊谷隊以降
4. 日本のアフリカ研究にみる今西・伊谷の影響
 4. 1 学問的系譜と研究者ネットワーク
 4. 2 日本アフリカ学会：文理共存の程よい関係
5. おわりに：研究者ネットワークの構築の充実にむけて

Keywords: Database of Researchers joining Overseas Scientific Research Projects, Prof. IMANISHI Kinji & Prof. ITANI Jun'ichiro, African Studies, Kyoto University, Network for Researchers.

キーワード: 国際学術研究調査関係研究者データベース、今西錦司・伊谷純一郎、アフリカ研究、京都大学、研究者ネットワーク

0. はじめに

2007年6月23日、平成19年度海外学術調査総括班フォーラムが連続ワークショップ『フィールドサイエンスと超域的ネットワーク』の第三回「海外学術調査データベース」と題して開催された。当日、私は所属しているフィールドサイエンス企画センター（FSC）がこれまでに構築したデータベースを使用し、自分自身の研究対象地域である東アフリカにひきつけて、日本におけるアフリカ研究の始まりとその展開を概観する試みを行なった。本稿では、当日に発表した内容の報告を行いたい。

1. 海外学術調査総括班とは

文部省科学研究費補助金（以下、科研費と記す）による海外学術調査の派遣は、1963年（S38）に本格的に開始された。それにともない、1975年（S50年度）以来、海外学術調査にたずさわる研究者・研究組織相互間や、研究者側と日本学術振興会（従来は文部省）とのあいだの情報交換や連絡調整に従事するための組織として海外学術調査総括班（以下、総括班と記す）がつけられた。1983年（昭和58年）からは、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（以下、東京外大AA研とする）にその事務局を置き、現在はFSCがその役割を担ってさまざまな大学や研究機関の研究者に研究分担者となっていただき、実働スタッフとともに活動をしている。

総括班では30年をこえる活動の結果、日本の海外学術調査に関する過去のデータが蓄積されてきたため、個々の研究者の限られたフィールドをこえた超域的な、学際的なネットワークの確立にむけ、データベースをつくる試みに着手した。当初は文部省から研究課題、研究者に関する情報をもらいうけ、以上のような事業を行なってきたが、科研費全体の増加と研究者の数の増加にともない、近年のデータについては、国立情報学研究所が科学研究費補助金に関するデータベースを構築している。AA研FSCが構築している国際学術研究調査関係研究者データベースについていえば、昭和38年度以降という、日本政府の資金により研究者が海外での学術調査に出かけ始めた初期の貴重な関連情報をデータベース化したことに意義がある。すなわち、現在の日本のアカデミズムが海外のレベルと同等に戦える素地を形成していく過程で、いかに、誰によって海外学術調査が行われ展開していったのか、ということが本データベースを用いると分野と地域を越えてみるのできるのである。

本報告においては、国際学術研究調査関係研究者データベースを用いることによってみえてくる、日本のアカデミズムにおける海外学術調査の組織化の歴史について、アフリカ地域（とくに東アフリカ）の事例から示したいと思う。

2. 日本のアフリカ研究の流れ

広い意味での日本の人類学はその初期、アフリカ研究者によってリードされてきたと言えるのではないかと、少なくとも旧文部省による資金援助の歴史をみると考えられる。

旧文部省が、資金援助を始めた1963年以降、どのようなところにアフリカ研究の拠点が築かれたのかをみると、そこには大きく三つの流れがある。

1961年から始まった京都大学理学部の今西錦司（人類学）を中心に始まった調査隊、1968年

から松沢勲（地質学）や諏訪兼位（地質学・岩石学）によって名古屋大学理学部にて始まった調査隊、1971年より東京都立大学理学部の戸谷洋（自然地理学）や門村浩（自然地理学）によって始まった調査隊である。ごく初期の1970年代には熊本大学体質医学研究所の沢田芳男（体質医学）を初めとする研究もあった。いまなお流れをくんでいる科研費による調査隊がみられるのは、先の三者である。なかでも、日本人によるアフリカ研究は、今西たちの調査隊が初めて着手したのであった。

今西錦司が梅棹忠夫との編著『アフリカ社会の研究——京都大学アフリカ学術調査隊報告』の「アフリカ研究序説」において、アフリカで研究を始めたいきさつを書いている[1966:21-22]。「われわれをアフリカに押しやった意欲は、だいたいつぎのような、ふた通りの、ちがった火元から、燃え上がっている。」と述べたうえで、戦時中、今西はボルネオの学術調査を企てたことがあり、そのひとつの目的がオランウータンの野外調査だったと述べている。というのも文献研究をした結果、類人猿のなかでゴリラ、チンパンジー、テナガザルの研究はなされていたが、オランウータンはまだ誰も着手していないことが分かっていたからだった。ところが時代は戦時下。ボルネオ調査は実現せず、だがなんとかモンゴルにたどり着き、モンゴル人、すなわちモンゴル遊牧民の調査を始めることとなる。蒙古草原の類型づけを行ない、また生産量などを調べ、「生産量生態学のはしり」に着手した。そのモンゴル調査の最中に終戦になり、引き上げざるをえない状況になって、次に頭に浮かんだのがアフリカだったというのだ。というのも、アフリカには、蒙古に似た遊牧民の世界があるに違いないという理由からだった。そしてやっと1958年に入り、アフリカ行きが実現することとなる。

当初の目的は、ボルネオ計画の延長で、類人猿調査を目的としていた。伊谷純一郎、今西錦司らは1958、1959、1960年に野生ゴリラ調査を行なう。

当時は文部省科学研究費補助金による海外学術調査の派遣が本格化する以前であり、それらの調査は財団法人日本モンキーセンターによるファンドで実施されていた。つづいて1961年、文部省によって調査研究の予算が認められ「京都大学アフリカ類人猿学術調査委員会」が発足し、今西らは当時のタンガニカ（現在のタンザニア）で活動を開始した。

調査隊の公式名称は「類人猿調査隊」を名乗っていたが、「類人猿」班と「人類班」というふたつの班が設けられていた。類人猿の研究のほか、人類の（いまや「」つきの）「未開社会」の研究をとりあげるといふ計画だったのである。当時の調査の目的として、野生の類人猿の社会生活をあきらかにするとともに、現存するアフリカ社会、とくに狩猟採集民の社会生活を研究して両者のつながりをみとめようとする、人類社会進化のあとをあきらかにしようという意図があったという。

梅棹によると、つまりは「はじめはあきらかに霊長類学な関心からでてきた研究だったが、やがて研究者たちの関心もひろがって、霊長類学、自然人類学、動物学、植物学、陸水生物学、古生物学、地学、医学、農学などの自然科学系諸科学とともに、社会人類学、文化人類学、社会学、人文地理学などの人文地理学などの人文・社会科学系の諸分野をふくんで、一大総合研究の観を呈するようになつた。また「日本の学術陣の海外における調査活動としては、規模において、南極観測隊につぐものと評せられている」と当時のアフリカにおける日本人による調査隊の位置づけられ方について述べている[梅棹 1966:27]。

3. 調査隊編成の変遷：データベースによる検索から

先にも述べたように、本データベースの大きな特徴は、文部省科学研究費補助金による海外学術調査の派遣が本格的に開始した初期の、貴重な詳細なデータが収められていることである。とりわけ1963（S38）年から1978（S53）年までの各年度に、どのような課題名で、誰が、どこに、いつからいつまで派遣されたかを知ることができる。

この検索情報を活かしてみていくと、とくに今西、伊谷という日本人として初めてアフリカに出向いた二人の甚大な組織力により、その後のアフリカ研究、またひろい意味での人類学の研究は大きく発展したことが、具体的に人名をおって伺い知ることができる。ある研究者が、誰とともにどこに行き、何かしらの——学問的、フィールドの歩き方なり——影響をうけたか、また道しるべをうけたかなど、その研究者の学問とその周辺を知るもしくは類推することもできるのである。

では具体的に、この今西、伊谷という二人のパイオニアがつくりだした研究組織が、どのように展開されていったのかをみていきたい。

3. 1 1961年から1967年の初期科研

この期間は毎年、メンバーの増減の調整が行なわれつつ日本からのアフリカ調査隊が組織された。たとえば第一回目の1961年隊のメンバーは、今西錦司（人類学）、東滋（動物生態学）、伊沢紘生（霊長類学・自然人類学）、伊谷純一郎（霊長類学）、西邨顕達（霊長類行動学）、富川盛道（社会人類学）、富田浩造（社会人類学）である。この科研の特徴は、ひとつの分野に絞るのではなく超分野であり、複合型の調査隊だといえる（図1）。

今西隊にはじまるアフリカにおける科研

1961年 今西 隊

タンザニア

今西 錦司 (人類学)
東 滋 (動物生態学)
伊沢 紘生 (霊長類学
・自然人類学)
伊谷 純一郎 (霊長類学)
西邨 顕達 (霊長類行動学)
富川 盛道 (社会人類学)
富田 浩造 (社会人類学)



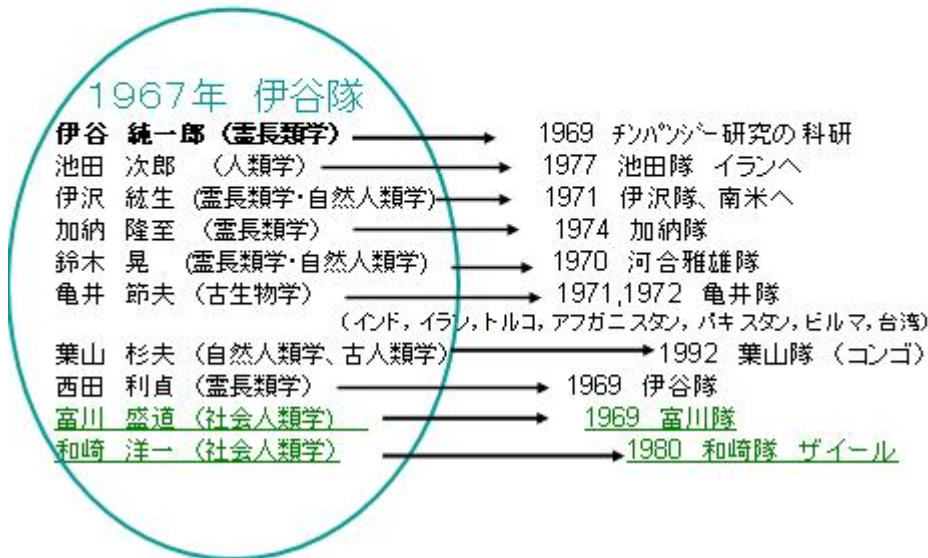
(類人猿班のカボコ基地:タンガニイカ湖のキゴマから南に80キロの無人地に建設)

<図1：第一回目 1961年今西隊> * 文系研究者の氏名にアンダーラインを施した。

3. 2 1967年の伊谷隊以降

1967年の科研を最後に、それ以降は調査隊が分野別に複数、組まれていくことになる。1965年の3月に今西が京都大学を定年で退官したあとは、伊谷が隊長を引き継いで科研を組織していた[今西・梅棹 1966:35]。67年のメンバーは伊谷純一郎（霊長類学）を隊長に、池田次郎（人類学）、伊沢紘生（霊長類学・自然人類学）、加納隆至（霊長類学）、鈴木晃（霊長類学・自然人類学）、亀井節夫（古生物学）、葉山杉夫（自然人類学、古人類学）、西田利貞（霊長類学）、富川盛道（社会人類学）、和崎洋一（社会人類学）であった。

1967年伊谷隊(第6次アフリカ類人猿学術調査)から、主に分野ごとに展開



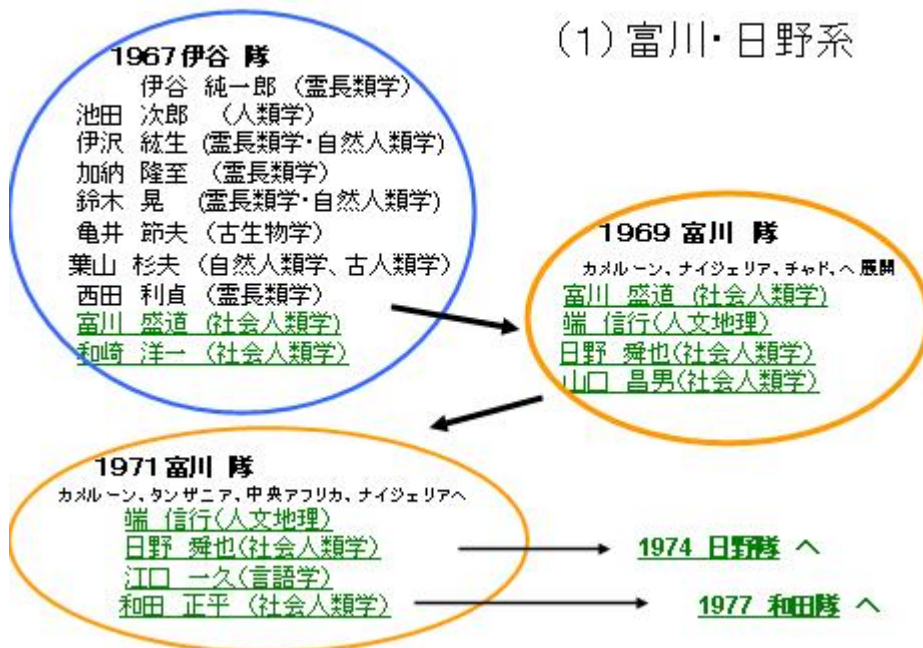
<図2：1967年の伊谷隊とその後の展開>

伊谷を中心にした霊長類学者たちは、この学際的な複合型ともいえる67年の調査隊ののち、1969年に伊谷純一郎、西田利貞、川中健二というメンバーでチンパンジー研究のための科研を組み、続いて1972年には森明雄（霊長類学）武田淳（生態人類学）原子令三（生態人類学）といったメンバーを加えて「アフリカの森林、オープンランド境界域における野生チンパンジーと未開狩猟採集民の生態学的比較研究」を行なう。

67年以降の科研が調査対象地域、分野ともに多方面に学問的発展した背景には<図2>、同年に全国共同利用の附置研究所として、京都大学霊長類研究所の誕生が関係しているだろう。1948年に今西錦司らが野生ニホンザルの調査を宮崎県幸島で始めて以来、その十年後の1958年に最初のアフリカ調査が行なわれ、再び10年ほどたった1967年に新たな研究拠点が築かれたのである。霊長類研究所の創設に伊谷が大きく尽力したのは有名で、しばしば言及される。

1967年 伊谷隊からの文系科研への展開

(1) 富川・日野系

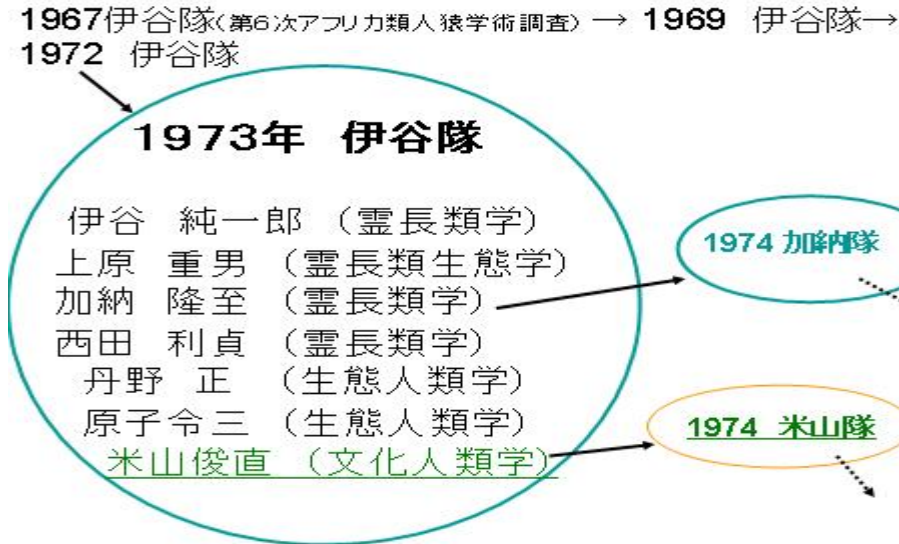


<図3 1967年の伊谷隊から文系科研への展開>

67年の伊谷隊のメンバーであった文系研究者、富川は、その後自らが隊長となって1969年にはカメルーン、ナイジェリア、チャドなど西アフリカ方面にもフィールドをひろげていった<図3>。メンバーは端信行(人文地理)、日野舜也(社会人類学)、山口昌男(社会人類学)を加えて組織した。つづく1971年の隊では江口一久(言語学)、和田正平(社会人類学)もメンバーとする。日野、和田はのちに自分自身の科研を組織するようになっていく。とくに日野は富川とともに1974、1976、1982、1984年、と90年代まで都市人類学の科研を組織する。このように、伊谷隊から展開していった文系の科研費による調査隊は、当時東京外大AA研に属していた富川と日野を中心に継続され、初期からの報告は1980年に富川盛道編『アフリカ大サバンナ学術調査プロジェクト報告 アフリカ社会の形成と展開—地域・都市・言語』と題して東京外大AA研から刊行されている。

3. 3 1973年の伊谷隊以降

伊谷は、専門を異にした研究者たちをひとつの調査隊に集めた、最後の複合型科研といえる 67年の調査隊の活動が終了したのち、1973年に一人のみ文化人類学者の米山俊直を加えた文理共存の科研による調査隊を組む<図4>。

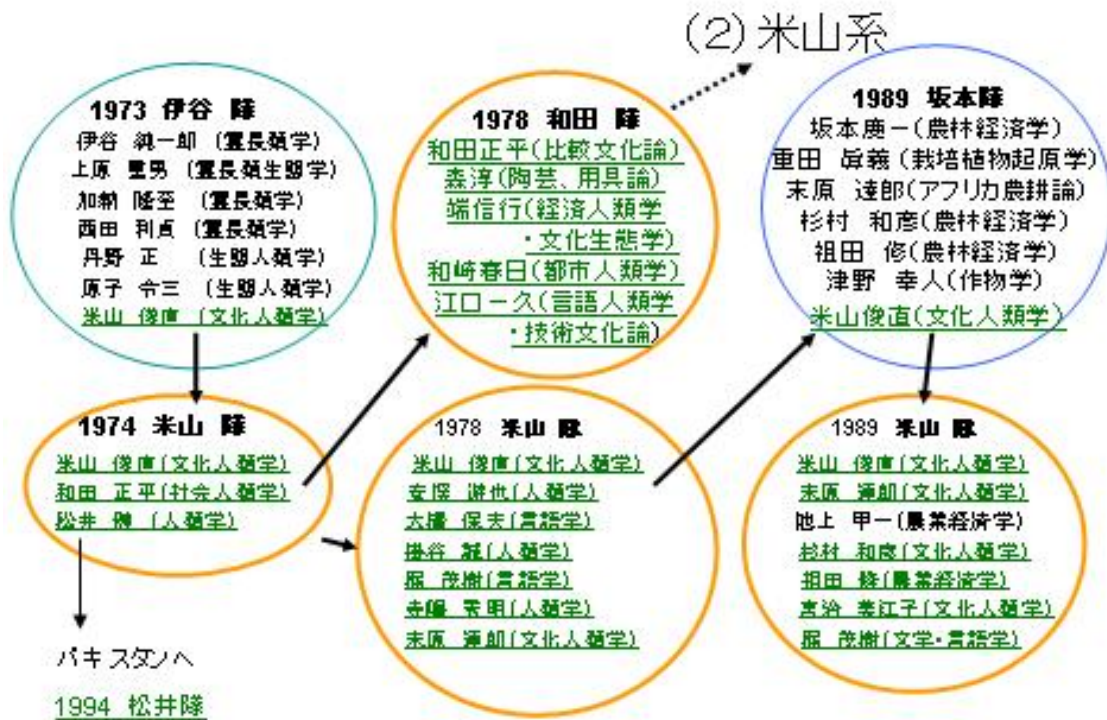


<図4 : 1973年の伊谷隊>

米山はまたこの科研以降、翌年の74年から、78年、89年、と文化人類学の科研を組んでいく<図5>。他方、加納は霊長類学の科研を組み始めるようになる<図6>。

では73年の伊谷科研の調査隊がさらにどのように展開していったのか、具体的にみてみよう。

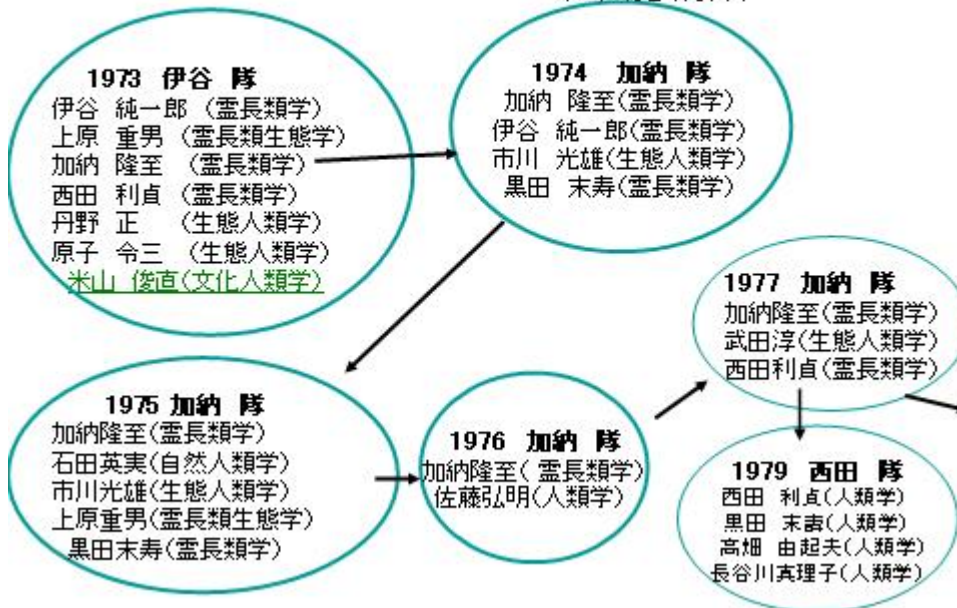
1973年伊谷隊からの文系科研への展開



<図5 : 1973年伊谷隊からの文系科研への展開 (2) 米山系>

1973年伊谷隊からの理系科研への展開

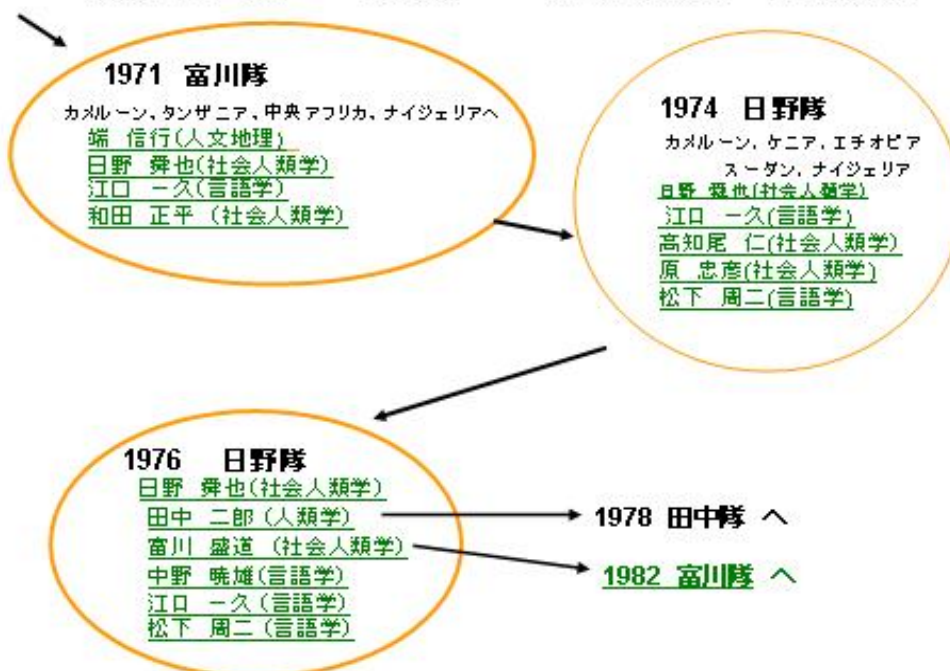
(3) 加納系



<図6：1973年伊谷隊からの理系科研への展開 (3) 加納系>

<図6>をみるとわかるように、霊長類学中心の理系科研の展開は加納が中心になって73年の科研から展開されていく。1974、1975、1976、1977年と加納が引き続き隊長をつとめて組織する。その加納隊のメンバーであった西田は別途1981年以降、独自に科研を組むようになり、タンザニア・マハレでのチンパンジー研究に集中していく。

1967伊谷→1969～ (1) 富川・日野系



<図7：1967年伊谷隊からの文系理系科研への展開 (1) 富川・日野系>

もうひとつ、別の展開をみてみよう<図7>。現在のアフリカ研究の流れのひとつを築いた田中二郎は、初期の1967年伊谷隊から69年には文系科研を展開してきた富川・日野の流れから、1976年の日野隊での調査研究をへて、1978年以降、80年代、90年代と継続して生態人類学系の自らの調査隊を組織し、多くの研究者を輩出する。

こうした初期のアフリカ研究の元手であった今西・伊谷隊の流れをくむ文系科研にかんしていえば、人文地理学、言語学、人類学という学際的な複合性があったと指摘できよう。

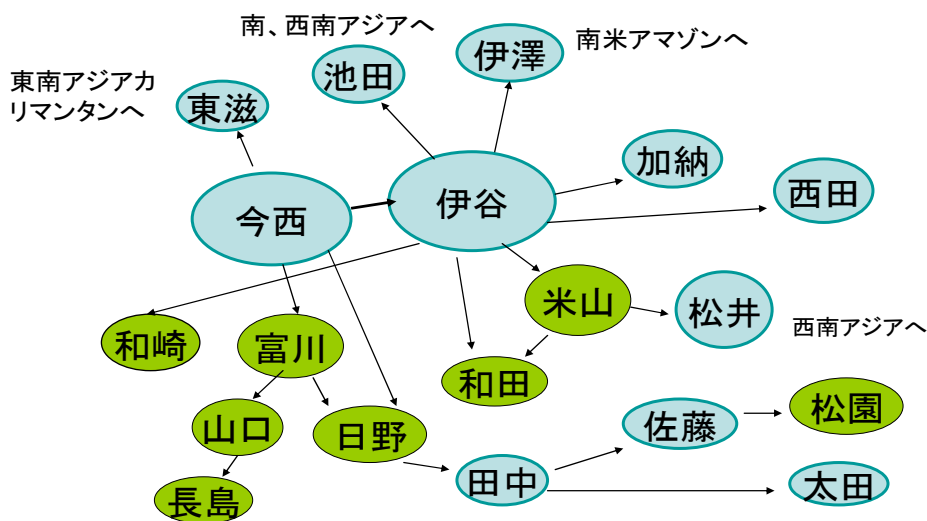
やがて一橋大学に社会人類学のコースを設置した長島信弘が、今西・伊谷隊の流れとは別に、並行して1977年度から社会人類学の科研を組織する。長島は『日本の民族学1964-1983』(1986年、弘文堂)のなかで、日本における東アフリカの20年の研究の傾向を(a)関東地区を中心とした社会-文化人類学者、(b)京大系生態人類学者、(c)東外大AA研の地域研究と大きく三つに分類した[長島・福井 1986: 264]。たしかに大きな流れとしてはうなずけるが、たとえば長島の社会人類学の科研のメンバーのひとりであった松園と今西・伊谷隊の流れを組む佐藤俊が、1994年度からともに科研費の調査隊を組織するという展開をみせていることからわかるように、3つに分類される研究者間の共同研究がなかったわけではない。

それは、これまで追ってきた科研の組織のされ方をもとに研究者ネットワークの系譜を描いていけば、よくわかる。

4. 日本のアフリカ研究にみる今西・伊谷の影響

4.1 学問的系譜と研究者ネットワーク

科研費によって組織された調査隊とその研究メンバーの系譜は、大きな流れとしてはたしかに、日本人として初めてアフリカの地で実地研究に着手した今西調査隊から始まっている。このことは、データベースに蓄積されたそれぞれの科研のメンバーについて丹念に追ひ、図式化したものからも読むことができる<図8>。



<図8：研究者ネットワークの系譜>

今西・伊谷が組織した科研以降の展開は、アフリカという地域もしくはアフリカ研究というディシプリンに固定されるわけではなく、多方面にわたっていくことがみてとれる。1965年に今西が京都大学を退官したあとは伊谷が引き継ぎ調査隊を組み、やがてそこからいくつかの隊が生まれ、現在の日本におけるアフリカ研究を、また霊長類学をささえる研究者を育ててきた。さる2007年9月22日(土)、京都大学において伊谷純一郎著作集の刊行記念シンポジウムが開かれ、霊長類学から生態人類学、文化人類学、民俗学など幅広い分野にわたる伊谷の教え子や伊谷と関わりをもった研究者たちが集い、伊谷学とその特長、影響力などが討論された。そこには、伊谷が影響を及ぼした、多方面にわたるフィールドワークを基調とする学問の発展の軌跡が見られた。とくに伊谷について語られたのは、伊谷の高度なデッサン力、メモ書きを丹念に文章にしていく根気強いフィールドノートのつくりかた、鳥やサルを愛でる視線と俳句をたしなむ文学性、権威的でない人をひきつける求心力など、伊谷の学問の姿勢と人柄そのものであった。まさにここに、日本における霊長類学に端を発するアフリカ研究の調査研究組織の組み方とその運営、発展の原動力の源が確認されるようであった。

また、さらに今西・伊谷から続く系譜上にいる米山の築いてきた文系研究者ネットワーク、日本のむら研究からアフリカの村落、都市研究等、超域的で、またテーマも学際的だったことは顕著である。2005年に亡くなった米山を偲ぶ会においても、米山となんらかの形で関わり学問的影響を及ぼしあった、もしくは影響を受けた超学閥の研究者が集った。米山も多分野で活躍する多くの弟子を育てたのは明らかである[米山 2006]。

日本におけるアフリカ研究の原点である今西、伊谷に始まる流れは、アフリカ研究の研究と教育の拠点としては京都大学をはじめ、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、そして一橋大学などを築き、つまり二人は分野、地域や学派を超えて学問の種をまき、研究者を育ててきたことがわかる。

同じ調査隊で複数の人間が研究活動を行なうということは、経験者の具体的なフィールドワークの方法、研究の方法を学び、また議論やあらゆる情報の共有ができるだけでなく、たとえばアフリカであればその土地で、フィールドでどのように過ごすのかという精神に互いが触れることになる。むしろ、自分とは異なる関心をもつ人、異なる専門の人とともにする機会があるということは、直接的に自分の学問的記述や追及の仕方に影響しないかもしれないが、フィールドの歩き方、もしかすると生き方そのものに大きく影響するものである。これまで、調査隊を同じくしフィールドワークをとともにした経験は、学会の母体となる人材を育ててきたのであり、今後もよき科研の組織化とチームワークがインテンシヴな研究を生み出していくことは明らかである。

4. 2 日本アフリカ学会：文理共存の程よい関係

2005年、日本アフリカ学会の研究大会は東京外国語大学を会場として開催され、生態人類学のシンポジウムが企画、実施された。そこで改めて確認されたのは、日本アフリカ学会という学会は文理共存の程よい関係が保たれているということであった。企画者の一人であった真島一郎は、次のように指摘している。「日本アフリカ学会は、日本の地域研究学会としては他に誇るべきいくつかの特色をそなえております。第一に、学際性をおびた研究団体としては、本学会は国内でも最も早い時期に発足した最古参の地域研究学会であること、第二に、組織の規模としても本学会は団体会員を入れれば総勢900に迫るほどのたいへんな発展を今日とげていること、また第

三の特色として、学際性とは一口に申しますが人文・社会系から理工系、医学薬学系、農学系、生命科学系にいたるまで、学際性という言葉が本来意味する文理共存の姿を本学会ほど理想に近い形で具現し維持している地域研究学会は他に稀である点もこれまでしばしば指摘されてまいりました」[2006:76]。

つまり、なぜ文理共存のよい関係が保てているかといえ、その一つの特長として、アフリカ研究のパイオニアたちによる「フィールドワークの所作・作法」、その精神が分野を超えて受け継がれていることにあるといえそうである[ibid]。

5. おわりに：研究者ネットワークの構築の充実にむけて

全国共同利用研究所として、東京外大 AA 研の事業のなかでも大きな役割である、共同研究プロジェクトの運営上問題になるのは、問題関心をともにする、研究者ネットワークづくりだろう。共同研究、そして科研費による海外調査においても、マンネリ化せずに新しい発想の持ち主をパワフルな人をいかに発掘して調査隊に入れるか、ということが重要になってくる。また科研による調査隊が、ひとつの共同研究のユニットとして有効に議論を重ね斬新な研究ができるかどうかは、メンバー選択の次元において、研究者ネットワークのありかたに大きな鍵があるかと思われる。

以上、本データベースをもちいて、私自身のフィールドであるサハラ以南アフリカで組織されてきた人類学関連の科研による海外学術調査隊のあり方をおうことで、科研が組まれてきた経緯、すなわち研究領域（分野）と対象地域、そして研究者たちのつながりをたどることになり、それらによって形成されてきた学問的系譜の流れをみることになった。

初めて訪れる土地で新しく研究を始める場合、たとえばその地域について本データベースを用いると、その地域においてはどのような学問的、研究者間の流れがあるのか、あるいは分岐や継続がみられるのかなど、その祖型をつかむことができるのではないかと考える。そうすることによって、自分の研究にとって誰とネットワークをくむといいのか、実際に誰とコンタクトをとって誰の論文にあたるといいかなど、なにかしら研究の手がかりが得られるのではと期待できる。

こうして描出されたのは学説史ではなく、実際的な研究のネットワークのありようだといえる。たしかに、アフリカ地域の場合は、学会をまきこむ形で文理共存のネットワークが比較的わかりやすく、互いにコンタクトをとりやすい素地がある。しかしながら、どの地域でも程度に差こそあれ、自然科学、社会科学をつきぬけた総合研究の時代があり、そののち、80年代以降はとくに科研の増加ともかかわるが政治経済の分野も多くなり、専門ごとの分化が進んでいるのだといえる。こうした傾向にあるいま、同じ分野のなかだけで議論しているとルーティンに陥りやすいのはいうまでもなく、フィールドワークに基づく研究に従事している各人の研究の核心にひびくような他分野との接触を、このデータベース、もしくは総括班の活動のなかでてがかりを得てくださることを期待したい。

<参考サイト>

国際学術研究調査関係研究者データベース

<http://www.aa.tufts.ac.jp/~gisr/drosrp.html>

<参考文献>

今西錦司・梅棹忠夫編

1966 『アフリカ社会の研究—京都大学アフリカ学術調査隊報告』、西村書店。

海外学術調査に関する総合調査研究班

1980 『海外学術調査関係研究者名簿（昭和 38～53 年度）改訂・増補版』、S54 年度科学研究費補助金（海外学術調査＝調査総括）。

真島一郎・河合香史

2006 「日本アフリカ学会第 42 回学術大会記念シンポジウム報告：変貌するアフリカ・変貌する諸学との対話—生態人類学、47 年後の意味」『アフリカ研究』 68:75-92.

富川盛道編

1980 『アフリカ大サバンナ学術調査プロジェクト報告 アフリカ社会の形成と展開—地域・都市・言語』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。

長島信弘・福井勝義

1986 「2 東アフリカ」日本民族学会『日本の民族学 1964-1983』、pp.264-273, 弘文堂。

米山俊直

2006 『米山俊直の仕事 人、ひとにあう。—むらの未来と世界の未来』人文書館。